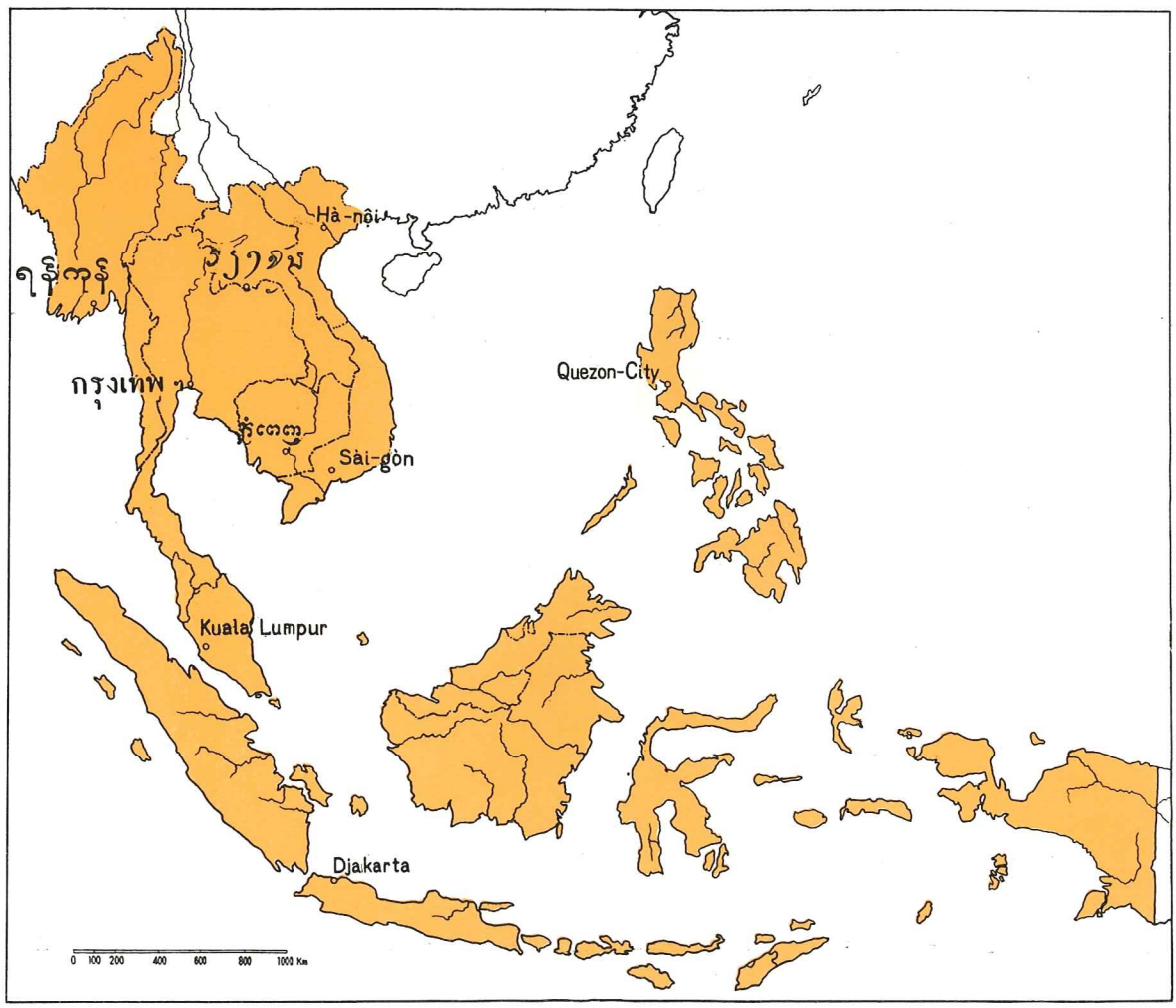
東南アジア研究センター　所報

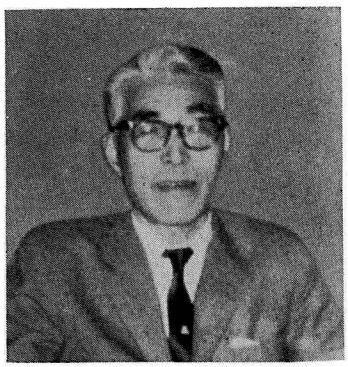
(II)　　1964/1965

京都大学

東南アジア地域


Hà-nội
Quezon-City
Sài-gòn
Kuala Lumpur
Djakarta
0 100 200 400 600 800 1000 Km

はじめに



東南アジア研究センター 所長　岩村　忍

京都大学東南アジア研究センターは，1963年１月学内措置として設置され，同年４月から，第１期５カ年計画の実施に着手した。昨64年６月，≪東南アジア研究センター所報Ⅰ，1963/64≫を創刊し 63年度の活動状況と64年度の計画を要約する年次報告にあてることとした。ここに，≪所報Ⅱ，1964/65≫を刊行し，1964年４月から65年３月に至る第２年度に実施した事業経過と，65年４月から66年３月に至る第３年度に実施しようとする事業計画とを報告したい。

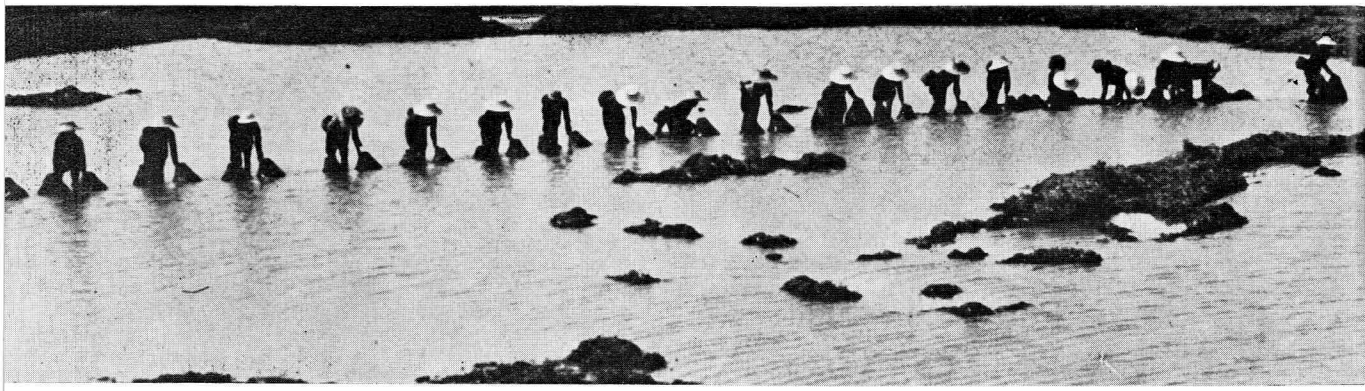
この年次報告において 明らかなように，第２年度の調査研究・国際国内交流・研究者養成・図書資料整備および出版の諸事業は，すべて，ほぼ計画どおり，順調な進展をみた。とくに，第２年度から，自然科学部門の本調査も開始された。人文・社会科学部門と自然科学部門との共同による≪地域研究≫は，諸外国の大学に例をみないところであり，共同研究の成果は広く期待されている。また，第２年度からタイ国に３カ村，マレーシアに１カ村，研究者がそれぞれ定着するインテンシブな村落調査も開始した。現地研究が踏査段階から定着段階に入ったものとして注目される。

第３年度の事業計画は第２年度において実施した事業の発展と考えてよい。もちろん，こまかい点では，たえざる反省にもとづいて計画の修正がおこなわれているが，現地調査を重視する私たちの基本原則はますます強調されている。また，本年度からは，現地研究の本報告書が刊行される予定で，出版計画が本格的に動きはじめる。

なお，この年次報告において，とくにつぎの２点を記さなければならない。第１には，本研究計画はフォード財団からの資金援助をもって出発したが，このカウンターパートとして1964年３月に京都大学東南アジア研究センター後援会が，平沢興前京大総長を会長として組織され，1964年度において約6,000万円の寄付金を関西を主とする財界から仰ぐことができた。財界へ紹介の労をとっていただいた東洋紡会長・関経連会長阿部孝次郎，大阪ガス会長井口竹次郎，関西電力社長芦原義重の諸氏をはじめ，寄付をいただいた財界各位，また募金に努力された奥田東総長をはじめ教官ならびに本部事務局の方々に謝意を表したい。なお，熱帯水田土壌研究のために在フイリピンの国際稲作研究所から３万ドル，1965年５～６月の≪東南アジアにおける日本の将来≫のシンポジウムのためにアジア財団から4,000ドルの寄付を得た。これらは国際稲作研究所チャンドラー所長，アジア財団スチュアート東京駐在代表の好意によるものであり，ありがたく思っている。

第２には，本年４月１日をもって，≪東南アジアの綜合的地域研究を推進する組織≫として東南アジア研究センターが官制化され，１部門の専任教職員がおかれた。官制化が実現されえたことは，奥田総長はもとより，文部省・大蔵省の関係者の御理解と努力のおかげであり，深謝しているしだいである。東南アジアの安定と開発が世界的焦点となっている今日，わたくしたちはここに決意を新たにして東南アジア研究に専念し，もって各位の好意と期待に酬いたいと思う。

1965年８月10日



タイ国中部の協同魚とり作業。一列にならんでふせたカゴのなかにはいる魚をつかむ。

センターのあゆみ

東南アジア研究センターは，1965年4月に，第1期5カ年計画の第3年目にはいった。調査研究をはじめとする事業計画は，いずれも順調な発展をつづけてきている。

官制化と組織　特記すべきは，かねて要求してきた東南アジア研究センターの官制化が，その必要性をみとめられ，1965年4月国立大学設置法施行規則改正によって京都大学に東南アジア研究を推進する組織としてセンターの設置が認められるにいたり，初年度として生物構造研究部門がおかれた。この研究センターは，発足の当初からめざしているように，学部，学科はもちろん，大学等の教育・研究機関の枠をこえた，ひろい研究者のあつまりとしての，総合的な研究を目的とする，わが国立大学では先例のない地域研究組織である。この官制化されたセンターの所長には，岩村忍教授(人文科学研究所)が従来にひきつづき併任され，本岡武助教授(農学部・農業経済学専攻)が教授に，外務省から石井米雄事務官（タイ国近代史専攻)が助教授に，飯島茂助手(農学部・文化人類学専攻）と大学院農学研究科博士課程をおえた荻野和彦(森林生態学専攻)が助手に就任した。事務組織として，藤山京次事務主任のもとに，2名の事務官が配置された。

専任教官以外の研究担当教官は約130名をこえ，学外研究担当者は約20名にのぼっている。官制化にともない，京都大学の学部長・教養部長・関係研究所長および研究センター所長をもって構成する東南アジア研究センター管理委員会が設置され，センターの管理にあたることとなった。他方，研究担当教官のなかから所長が委嘱する委員をもって構成される運営委員会がおかれ，研究センターの業務の企画および運営について審議することとなつている。このほかに，現地政府，大学等の諸機関との交渉にあたるためにバンコクに連絡事務所がおかれ，研究の促進をはかつている。

資金　研究センターの研究その他の事業計画に要する諸経費のため，官制化にともない計上される国費のほか，フォード財団から第1期5カ年計画にたいして35万ドルが交付されている。フィリピンにある国際稲作研究所から熱帯水田土壌研究のために3万ドルの資金が交付された。

他方，東南アジア研究センター後援会が1964年3月，平沢興前京都大学総長を理事長として設立された。財界の協力をえて1965年3月末をもつて，ほぼ6,000万円近くの募金を達成することができた。この資金は，主として，自然科学部の調査費用にあてられる。

1964年度事業の成果

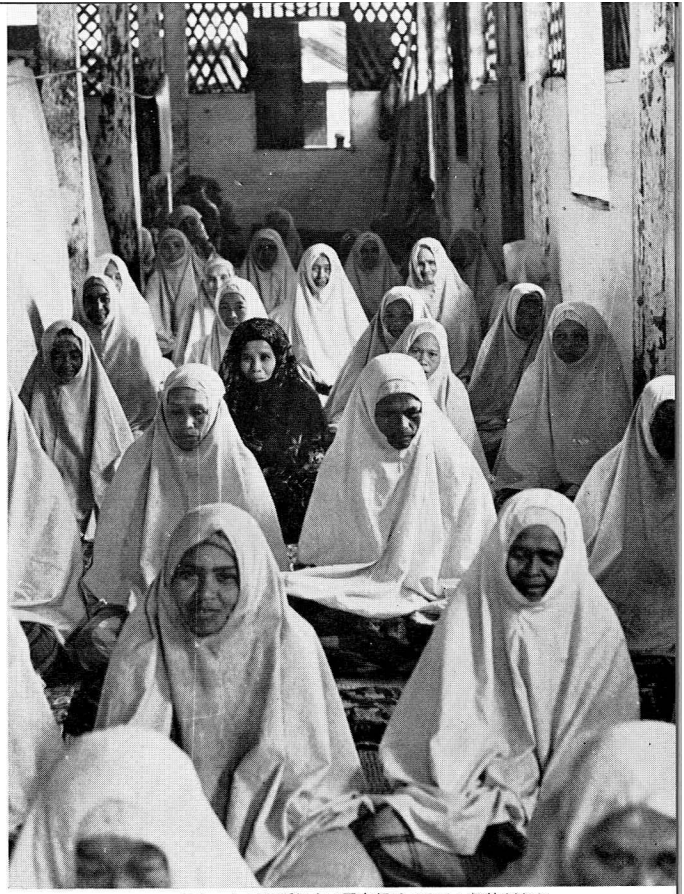
研究事業　1964年度にはのべ47人の研究者が東南アジアにおもむき次の調査を行なった。

I　社会科学部

1.　ビルマ・タイ国地域調査

本岡教授は1964年10月より65年1月まで，農業改良技術の農民段階への滲透をテーマとして，タイ国北部，中部，東北部において調査をおこなった。成果の一部は "タイ国における農地問題と農地制度改革" 東南アジア研究 II—4 '65, "Problem of Land Reform in Thailand with Reference to the Japanese Experience" Paper presented before the Symposium on *Japan's Future in Southeast Asia*, May 31-June 2 '65, "東南アジアの農業開発" 畑地農業 No. 81-82 '65などとして発表されている。農業技術を担当する渡部忠世助教授(京都府立大学農学部)は，タイ国における水稲栽培技術の調査を63年10月から64年6月までおこなった。その間インド，パキスタン，セイロン，マレーシア，フィリピン等の農業試験場を歴訪し，水稲試験研究の現状を調査した。成果の一部は "タイ国における水稲栽培技術について" 東南アジア研究II—1，"タイ国における水稲の土地生産性についての覚書" 熱帯農業 VII—2，"熱帯アジアの農業研究機関の現状" 東南アジア研究II—4に発表された。

地域調査は，飯島茂助手がタイ国北部のメーサリァン，水野浩一研修員は東北部のコーンケーン，矢野暢研修員は南部ソンクラーにおいて1964年夏から65年春にかけて1カ年近く村落に定着し，経済，社会組織，信仰などについて徹底的な調査をおこなった。その中間報告はそれぞれつぎのように発表された。飯島茂 "カレン族調査ノート" 東南アジア研究II—2，"タイ国北部における山地カレン族の文化変容" 東南アジア研究II—4，"Cultural Change among the Hill Karens in Northern Thailand", *Asian Survey*, Berkeley, V-8 (August 1965), 水野浩一 "調査



マレーシアに近いタイ国南部はイスラム教徒がおおい。年2回祈禱堂のなかにはいることを許された女たち。黒装束の人はメッカ巡礼をおえた女ハジー。

マレーシア・ケダー州の米作農村アロール・ジャングスの田植え作業。

まじないで病気をなおそうとする病人（左）も，呪術祈禱者（右）もイスラム教徒。タイ国南部。

村ドーン・デーング" 東南アジア研究Ⅱ—2，矢野暢 "A Socio-Anthropological Survey in Songkhla Province : A Preliminary Report" 東南アジア研究Ⅱ—1。

2. マレーシア・インドネシア地域調査

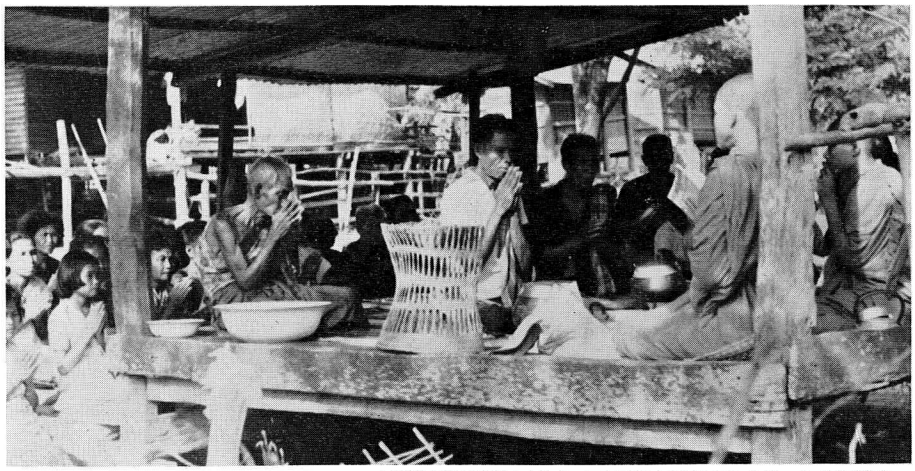
1964年7月以降故棚瀬襄爾助教授(文学部)をリーダーとし，吉田光邦助教授(人文科学研究所)，築島謙三講師(東京大学東洋文化研究所)，口羽益生助教授(竜谷大学文学部)，坪内良博研修員(文学部)およびマレー大学留学中の前田成文(文学研究科社会学専攻)からなる調査班は，マレー半島北西部ケダー州のアロール・ジャングス付近のマレー人米作村落に定着して社会構造，物質文化ならびに国民意識の調査をおこなった。ここではタイ国での村落調査の場合とことなり，1カ村に数名の研究者が短期定着し，いろいろな角度から調査分析する方法をとっている。成果の一部はすでに吉田光邦 "乾燥と湿潤と" 西南アジア研究 No. 13，"マラヤ紀行" 東南アジア研究Ⅱ—1，口羽益生・坪内良博・前田成文 "マラヤ北西部の稲作農村—農地所有の零細化について—" 東南アジア研究Ⅲ—1などに発表された。

3. 東南アジア諸国における政治組織と政治過程の比較研究

猪木正道教授(法学部)は1964年12月メーサリァンまで足をのばして，タイ国の政治的近代化の現況を調査した。65年3月から4月にかけ福島徳寿

タイ国南部のイスラム教徒は祖先の墓の前に縁者があつまり故人をまつる。一神教のイスラム教徒にはありうべからざることなのだが……。

タイ国東北部ドーンデーング村で，祭日に寺にあつまり説教をきく人々。



村の集会所に僧侶をまねき，平穏安息を祈禱してもらう。タイ国東北部。

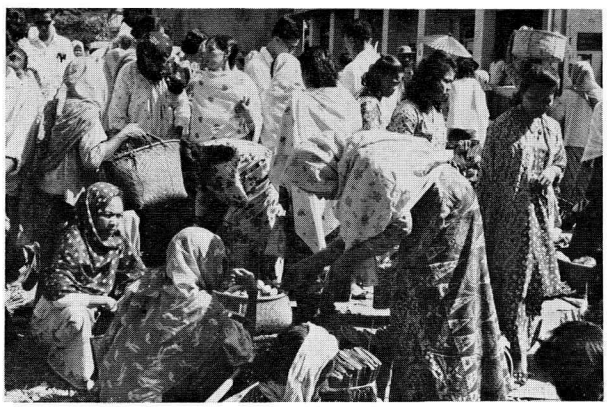
郎教授(法学部)はタイ国における地方行政とくに郡長制度を，清永敬次助教授(法学部)は税制および税務行政を調査した。園部逸夫助教授(法学部)は64年９月から約２カ月間，バンコク，クアラルンプール，シンガポール，プノンペンにおいて行政法にかんする諸問題を研究した。香西茂助教授(法学部)は64年12月から65年２月にかけ，また高坂正堯助教授(法学部)は65年１月から２月にかけて，ビルマ，マレーシア，インドネシア，タイ国の国際関係について調査した。

4．東南アジアにおける教育制度ならびに教育構造の比較研究

1964年６月から９月まで相良惟一教授(教育学部)はタイ国，マレーシア，インドネシア，カンボ

元日の朝まだき，バンコク王宮寺院広場には人があつまり行乞の僧侶に布施をきそう。

ペナンの鄭氏家廟にある19世紀のカピタン鄭景貴の銅像。経済発展につくした有力者で，現在もその名声をしたう華僑はおおい。



マレーシア・ケダー州西北部の市場風景。

ジアの諸国における教育構造を比較調査し，その近代化におよぼした影響について考察した。その成果の一部は "東南アジア諸国比較教育行政機構論" 東南アジア研究Ⅲ—1に発表された。佐藤幸治教授(教育学部)は64年8月ビルマ，タイ国における Satipatthana 禅法による人格調査の実際を視察し，"ビルマ・タイ等における Satipatthana による人格形成"東南アジア研究Ⅲ—1を発表した。

5. タイ国北部における諸言語の調査

西田竜雄助教授(文学部)は三谷恭之(文学研究科言語学専攻)とチュラーロンコーン大学文学部に留学中の桂満希郎(文学研究科言語学専攻)の参加をえて，タイ国北部のチェンマイ，チェンライおよびターク周辺において，アカ語，ラフ語，リス語，ビス語ならびに北部タイ語の諸方言の調査をおこなった。アカ語，ラフ語，リス語についてはそれぞれの基礎語彙約1,500語と基本文100あまり，ビス語は基本語彙約600語を収録した。これら諸言語については，いまだに記述言語学的な調査報告がなく，ことにビス語はその存在さえも学界に知られていなかった。

6. 東南アジア経済における近代化要因の研究

鎌倉昇助教授(経済学部)は，1964年7月から8月にかけてバンコク，ラングーン，サイゴン，クアラルンプールをまわり，東南アジア諸国において，近代化を阻害する諸要因にかんする研究の予備調査をおこなった。

7. 東南アジアにおける宗教の研究

藤本勝次教授(関西大学文学部)は，1965年1月から3月まで，マレーシア半島部におけるイスラム教徒の調査におもむき，行政法令，宗教局発行の文書等の収集にあたった。

藤吉慈海助手(人文科学研究所)は64年12月から65年3月にかけ，ビルマ，南ベトナム，カンボジア，タイ国における仏教が近代化にはたしている役割を調査した。とくにタイ国においては，北部，東北部，南部の村落の仏教と都市におけるそれの比較をこころみた。

8. 東南アジア華僑の歴史的社会的研究

日比野丈夫助教授(人文科学研究所)は中村孝志教授(天理大学文学部)，藤原利一郎教授(京都女子大学文学部)，船越昭生助手(人文科学研究所)らと1964年12月から65年3月までベトナム，カンボジア，タイ国，マレーシアにおける華僑社会の実態調査と歴史文献の収集をおこなった。華僑関係の資料は各地に無数に存在するが，いずれもほとんど未整理の状態にあるので，総合目録をつくりあげる必要を痛感した。

山地民

山地カレン族の少女。

山地民は食糧生産を焼畑にたよっている。開コン地にタネモミ(陸稲)をまきつけるヤオ族。

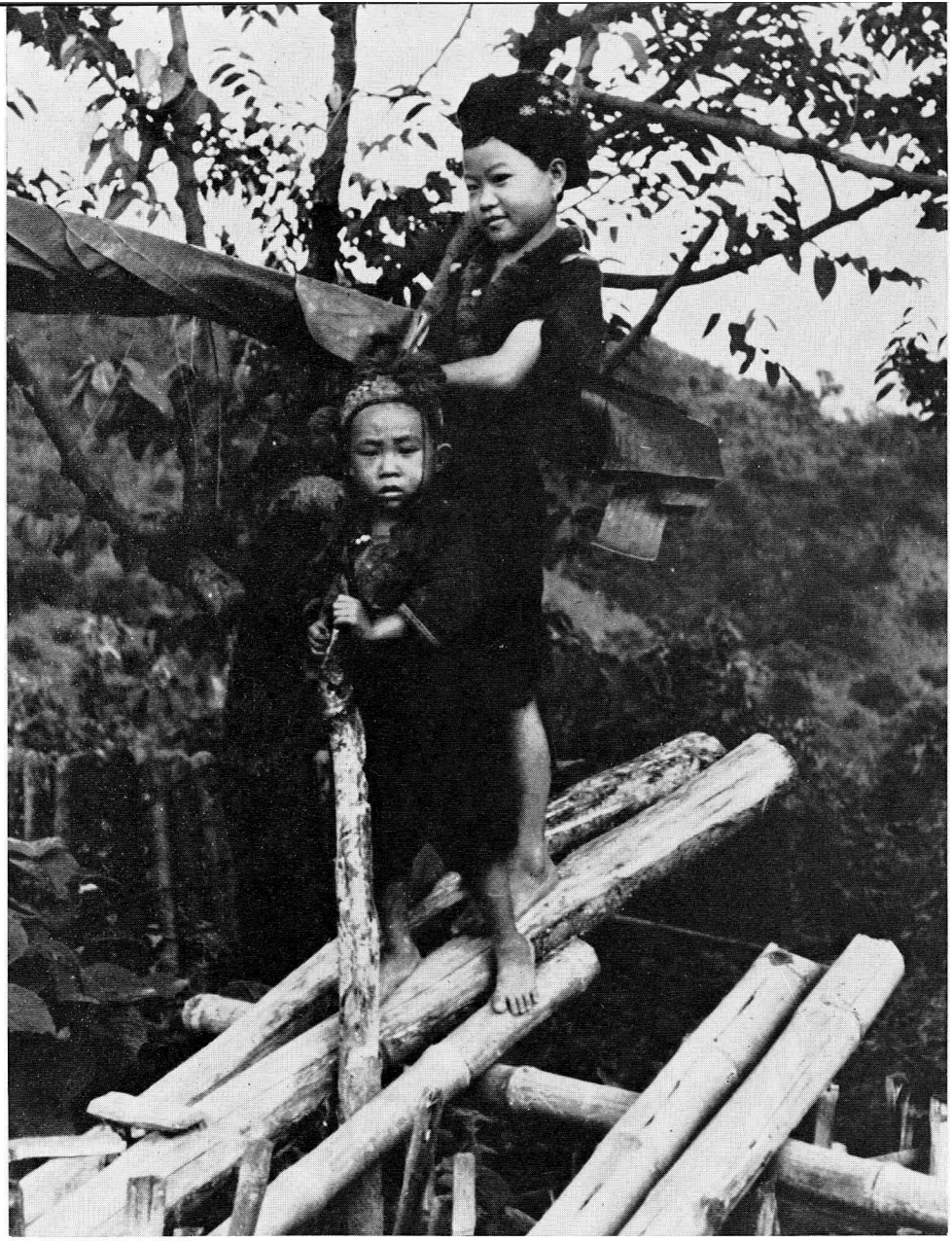
山地民の村は集村がおおい。村の周囲を木や竹の棚でとりかこみ外敵や野獣の襲来にそなえている。

タイ国にすむ山地民たち。

着飾ったアカ族のむすめ。

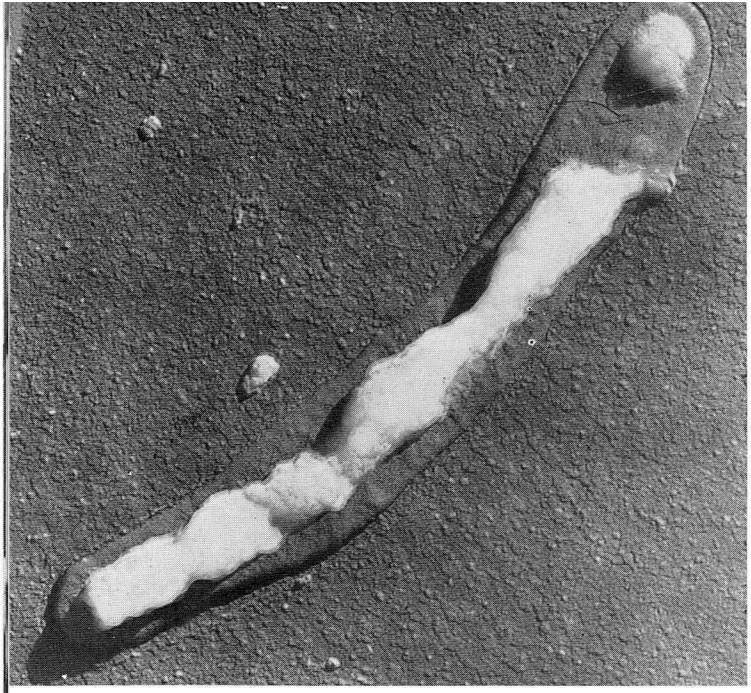
ビルマ風の服装をしたラフ・シ族のむすめ。

正装をしたアカ族の青年。

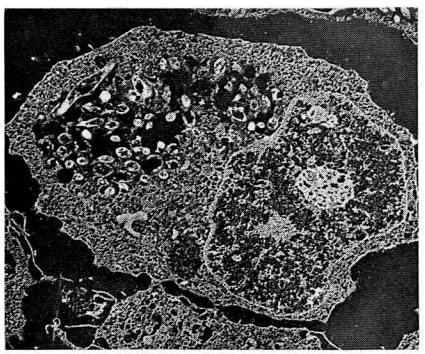


棚にかこまれたヤオ族の村への出入りは，はしごなどによらねばならない。

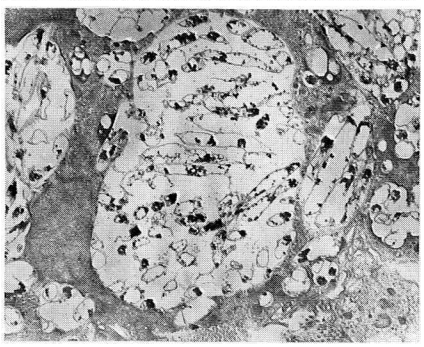
山地民ヤオ族の焼畑における陸稲の収穫。



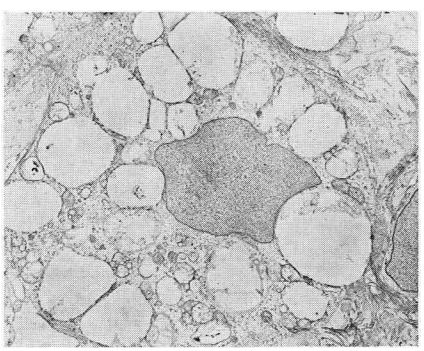
1943年スルフォン剤が〝らい〟治療に有効であることが発見されて，〝らい〟病は全治可能になった。電子顕微鏡写真上は患者の感染組織からとった活性〝らい〟菌。形態的には結核菌と似ている。



発病後まもない患者の体細胞には細胞質の充満した活性〝らい〟菌がみられる。



治療をはじめると細胞膜のみをのこし細胞質が凝縮し活性をうしなう。



数年後には〝らい〟菌は完全に分解され，電子顕微鏡によっても活性のものはみられず，わずかに細胞膜の残査をのこすのみとなる。

II 自然科学部

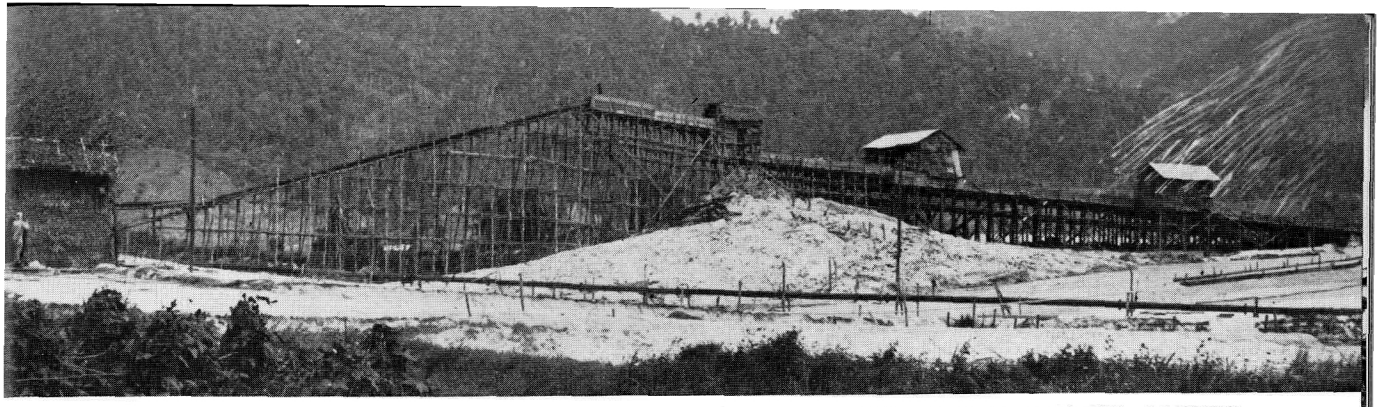
1. 医 薬 班

(1) 東南アジアにおける〝らい〟の実態調査とその病理学的研究

西占貢教授(医学部)は戸田圓二郎副手（医学部，アジア救ライ協会医務部長）とともにバンコク，コーンケーン，クアラルンプール，マドラスにおいて〝らい〟の実態について臨床的ならびに病理学的調査をおこなった。とくにタイ国では厚生省 Leprosy Control Division の Dr. Chaisri Kettanurak, Dr. Anand Charoenbhakdi らの協力をえて，〝らい〟腫患者の DDS 治療による〝らい〟菌および病巣の変化を電子顕微鏡学的に研究した。また〝らい〟反応相の臨床病理学的研究をもあわせておこない，病理組織標本70例，電子顕微鏡標本70例を採集した。病理組織標本はバンコクで切片標本に作成した。電子顕微鏡標本は現在京都大学医学部皮膚特別研究施設で検査をおこなっている。成果の一部は M. Nishiura, & E. Toda: "Clinical and Pathological Observation of Reactional Cases of Leprosy in Thailand" 東南アジア研究Ⅲ—1に発表された。

(2) タイ国における肺結核の現状調査

寺松孝助教授，前川暢夫助教授(結核研究所)は1964年12月から65年2月まで，おもにバンコクでタイ国厚生省 T. B. Control Division と Central Chest Hospital の協力をえて，肺結核の現状調査ならびに今後の研究計画の検討をおこなった。寺松助教授が主として外科学的側面を，前川助教授は内科学的側面を担当した。寺松助教授は〝タイ国における肺結核の現状—肺結核外科を中心として—〟東南アジア研究Ⅲ—1において外科的療法の必要性を強調した。また前川助教授は〝タイ国における結核の現状-結核化学療法の立場から-〟東南アジア研究Ⅲ—1において，タイ国における結核患者の多くが外来で比較的弱い化学療法術式により治療されていることを指摘した。



タイ国南部からマレーシアの半島部におおくみられる重力選鉱法による錫製錬所。

2. 地　学　班

（1） タイ国，マレーシアの地質および鉱床の予備調査

1964年11月から12月にかけて，滝本清教授，吉住永三郎教授（工学部）はバンコク，チェンマイ，クアラルンプール，イポーにおいて螢石，マンガン鉱石，錫，鉄鉱石の物理探査法にかんする予備調査をおこない，その成果を，滝本清 "タイ・マレーシアの地質鉱床" 東南アジア研究Ⅲ—1に発表した。

（2） 非鉄金属資源ならびにその製錬にかんする研究

森山徐一郎教授（工学部）は1964年10月タイ国，マレーシアの錫石イルメナイト資源およびその製錬法を視察し，鉱業・製錬にかんする資料，鉱石標本を収集した。その概要は，"タイ・マレーシアの鉱業について" 東南アジア研究Ⅱ—4として報告された。

（3） 土質ならびに地下水の研究

松尾新一郎教授（工学部）は1964年12月から65年1月にかけて，タイ国の東北部と中部で土質・地下水の性状の概略を把握し，地下水利用方式の立案に利用できる基礎データを収集した。

3. 農 業 生 産 班

（1） マレーシア，タイ国の水田土壌調査

川口桂三郎教授は久馬一剛助手（農学部），古川久雄（農学研究科土壌学専攻）とともに，1965年1月から3月までマレー西北部およびタイ国において，熱帯水田土壌の実態と地力の発現機構をあきらかにするための土壌試料標本を採集した。前年度におこなったタイ国中部，東北部の試料とあわせ，土壌肥沃度の判定，土壌生成条件の推定をおこなう。この調査にはカセーサート大学に留学している福井捷朗（農学研究科植物栄養学専攻）が協力した。

（2） 東南アジアにおける農業かんがいおよび排水にかんする調査

冨士岡義一教授（農学部）は1965年1月から3月まで，タイ国東北部，北部，中部，マレーシアのタンジョンコラン地方で，かんがい排水，農地開発にかんする予備調査をおこない，かんがい水量，排水量および水利開発方式にかんする基礎資料を持ちかえった。

（3） 東南アジアにおける広域水利計画の予備調査

南　勲助教授（農学部）は1964年3月および6月の2回にわたってタイ国，フィリピン，カンボジアの広域水利計画を視察した。とくにタイ国においては，チャオプラヤ水利計画における塩害浸入機構を調査した。タイ国東北部における降雨群と流出量の相関関係の解明のため，タイ国政府灌漑局との共同研究がおこなわれる。予備調査の成果は "東南アジアにおける広域水利計画の予備調査報告" 東南アジア研究Ⅱ—2，"東北タイにおけるメコン河諸支流の流量特性" 東南アジア研究Ⅱ—4に発表された。

4. 生　物　班

（1） 生物相研究の予備調査

吉井良三教授（教養部）は1964年3月から4月にかけて，フィリピン，タイ国などにおいて生物相研究の予備調査をおこなった。

田川基二助教授（理学部）は1965年3月から約1カ月間主としてタイ国の植物相，とくに高等隠花植物の資料採集にかんする予備調査をおこない，タイ国北部，南部において約1,500点の腊葉標本を採集した。調査にはタイ国政府森林局のTem Smittinand氏の協力をえることができた。

研究例会　現地調査による研究は，いずれも帰国後研究例会で中間報告され，同時に "東南アジア研究" 誌にも発表されている。研究例会にはまた学外から講師を招いて講演を依頼している。すなわち R. B. Jones 教授 (Cornell Univ.)，山本達郎教授(東大文学部)，N. Tarling 教授(Univ. of Queensland)，M. Roelofsz 博士 (National Archives, The Hague)，梅山猛博士(日本キリスト教海外医療奉仕団)，岡正雄教授(東京外語大A．A言語文化研究所)，安芸皎一教授(関東学院大)，吉良竜夫教授(大阪市大理学部)の各氏の特別講演があり，いずれもきわめて示唆に富むものであった。

出版事業　"東南アジア研究"誌は順調に号をかさね，1964年度には第1巻第4号および第2巻第1～4号が刊行された。第2巻第3号は後述のマラヤ稲作シンポジウムの特集号にあてられた。

交流事業　Miami Univ. の John H. Badgley 助教授が研究センターの招きにより，1964年9月来日し10カ月にわたり法学部で東南アジアの政治にかんする講義およびセミナーを担当した。また1965年5月から6月にかけて研究センターが主催した国際シンポジウム "東南アジアにおける日本の将来" (*Japan's Future in Southeast Asia*) は後述のとおりおおくの成果をあげたが，バジリー助教授はこのシンポジウムで重要な役割をはたし，1965年6月おしまれて帰国した。

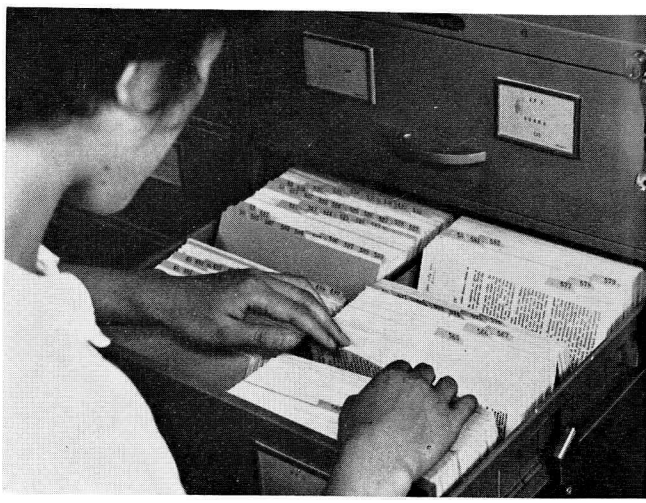
1964年9月 "マラヤ稲作シンポジウム" が農林省，海外技術協力事業団との共催によりひらかれ，60余名の専門家の出席をえて，これまたおおくの成果をおさめた。

1965年3月から4月，岩村　忍所長が HRAF 理事会とアメリカ・アジア学会に出席した。

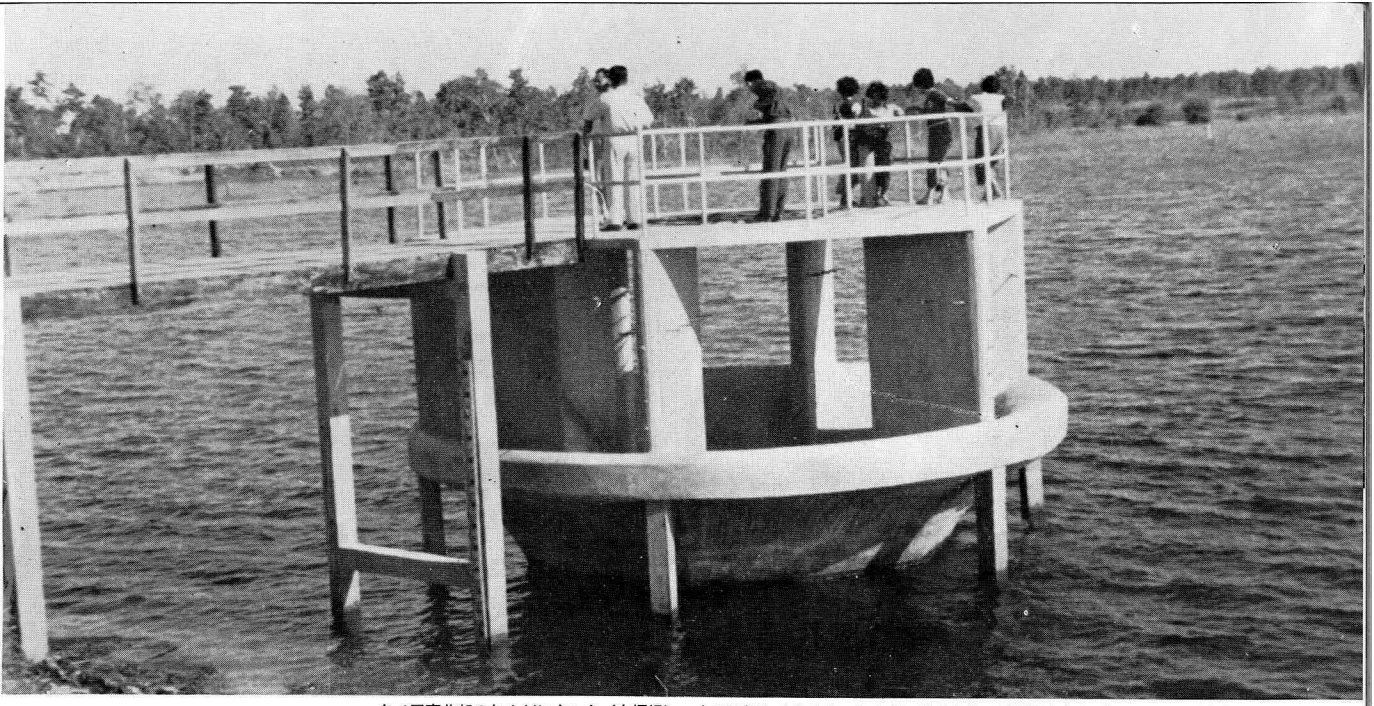
図書資料整備事業　HRAF (Human Relations Area Files) は1965年6月をもって分類整理をおわり，7月から公開された。研究センターでは利用者の手引き "HRAF" を編集し刊行した。

養成事業　大学院学生を現地語の習得と調査方法の研究のために東南アジア諸国または欧米の大学へ留学させる。第1年度には4名を採用し，ほかに1名をフルブライト奨学生に推せんした。すなわち，前田成文(文学研究科社会学専攻)はマレー大学で1964年5月から65年5月に至る間，文化人類学を専攻，とくに基本文献を収集し，またアロール・ジャングスの村落調査にも参加した。桂満希郎(文学研究科言語学専攻)は1964年6月より65年5月までタイ国チュラロンコーン大学文学部タイ語学科に留学し，タイ語の習得と文献資料の収集につとめ，同時に言語班の西田助教授らとタイ国北部でアカ語をはじめ方言の調査に参加した。福井捷朗(農学研究科植物栄養学専攻)は熱帯農業土壌の植物栄養学的研究を目的として，1964年5月から65年5月までタイ国カセーサート大学大学院に留学した。小林一三(農学研究科農林経済学専攻)は1964年9月より米国コーネル大学大学院に留学し農業開発理論とインドネシア語の修得にあたっている。酒井敏明（文学研究科地理学専攻）は研究センターの推せんによりフルブライト奨学生に採用され，1964年7月から65年6月まで米国エール大学大学院において地理学を専攻し，あわせてビルマ語を学んだ。

現地調査にでかける研究者の便に供するため，研究センターではタイ語，インドネシア語の日常会話習得を目的とする語学講習をおこなっている。タイ語の講師にはパイラット・サイチュア氏(農学研究科林学専攻留学生)を，インドネシア語の講師にはサヌシ・クスマプトラ氏(京都工芸繊維大学留学生)を依頼している。



整理をおわった HRAF は公開され研究者の利用に供されている。



タイ国東北部のかんがいタンク（土堰堤）。水の不便なこの地方のかんがい排水方法には解決されねばならぬ問題がおおい。

1965年度事業の展望

部門の拡充　研究センターは1965年4月1日に官制化された。しかし，総合的な地域研究をめざす研究センターとしては，今回認められた一部門の定員のみでは，本来の目的を十分に達成することはできない。現地調査に参加した大学院学生だけでもすでに20名を数えており，東南アジア研究の新らしい分野を着実に開拓しつつある。この研究目的を達成するためには，人文・社会科学，自然科学をふくむすくなくとも5部門，1資料室の急速な整備が強く要望される。

研究計画　第1期5カ年計画にもとづき，本年度も社会科学部の現地調査がひきつづきおこなわれる。自然科学部は，従来の予備調査を終え，本調査を開始する。

I　社会科学部

1.　ビルマ・タイ国地域調査計画

本岡教授は1965年10月より66年3月まで，タイ国中部平原の農村において，"農業開発にかんする研究"をおこなう。とくに農業における土地条件の整備，農業普及組織，農家における資本蓄積の可能性，農産物価格と農業生産資材価格，農産物流通機構と農村協同組合などについて調査する。

飯島助手は1965年10月より66年6月まで，タイ国における山地民社会の平地民化等の問題を，メーホンソンの山地および平地の Skaw Karen について比較研究する。

水野浩一研修員は1965年11月から66年6月にかけ，タイ国東北部のコーンケーン付近において，村落の変動過程を国民形成との関連において把握する。昨年度の調査村および同県内の他村での開発計画が村民におよぼす影響を比較する。

矢野暢研修員は前年度に行なったタイ国南部のイスラム村落ドンキレク村における調査を継続し，マレーシア北西部ケダー州におけるイスラム村落との比較研究をする。

2.　マレーシア・インドネシア地域調査計画

口羽益生助教授（竜谷大学文学部）と坪内良博研修員は，前年度にひきつづきケダー州アロール・ジャングスにおける米作地帯のマレー人村落の調査をすすめる。同村およびその周辺において宗教班の藤本勝次教授（関西大学文学部）はイスラム社会の宗教学的分析を，梅田輝世（関西学院大学大学院文学研究科社会学専攻）は，イスラム社会における女性の地位について，前田清茂講師（天理大学外国語学部）は近接の中国人社会を調査する。この研究体制で，アロール・ジャングスの実態調査を完成する。期間は1965年6月から10月に至る。

前田成文（文学研究科社会学専攻）は1965年5月から66年3月までマレー東部に1カ村をえらんで定着し調査をする。

3. 東南アジアの言語

泉井久之助教授(文学部)は1966年3月から約3カ月間，主としてフィリピン諸島において，マレー・ポリネシア諸語を採録し，比較言語学的研究を行なう。

4. 東南アジアの政治構造

神谷不二教授(大阪市立大学法学部)は，1965年11月から12月にかけ，東南アジアの政治機構と政治過程を調査する。

5. 東南アジアの宗教

前年度にタイ国，ビルマ，カンボジア，南ベトナムの仏教教団の現状を調査した藤吉慈海助手(人文科学研究所)は，さらに1965年12月より66年1月までラオス，マレーシアにおける仏教の現況を調査。とくに戒律と瞑想法について研究する。

藤本勝次教授(関西大学文学部)は，1965年7月から9月まで，マレーにおけるイスラム社会近代化との関連において，ザカート(イスラム宗教税)，法廷文書と教育の実状を調査する。

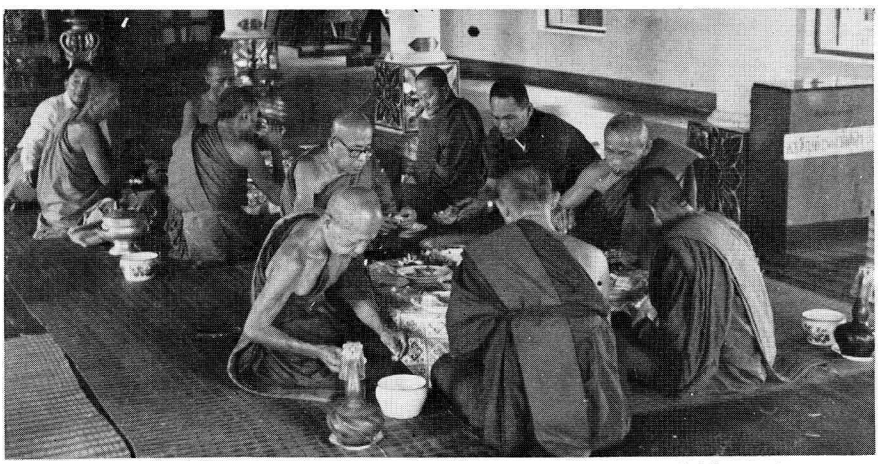
6. 東南アジアの教育

森口兼二助教授(教育学部)はタイ国の学校教育，社会教育の各領域の諸問題を近代化促進との関連において把握するために，1965年10月から66年1月にかけ現地で調査する。

7. 東南アジアの経済

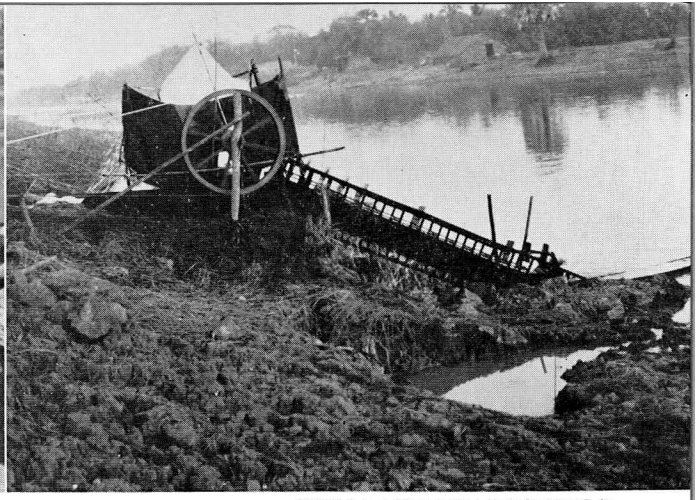
鎌倉昇助教授(経済学部)は1965年10月から11月にかけ，マレーシアにおける経済計画編成の方法および動向，とくに経済成長と農業生産性の関係，工業開発の動向，所得分配の均等化および水準上昇などについて調査する。

ヤシの葉に刻んだ経文。



仏教僧侶の昼食，僧侶は戒律により午後食物をとらない。

タイ国では Dykes and Ditch Act にもとづき末端地への配水組織を整備するための工事がすすめられている。



裏作物のかんがいには動力竜骨車が用いられてきた。タイ国中部ラングシット附近。

II 自然科学部

1. 医 薬 班

東南アジアにおける抗酸性菌疾患の研究

（1） 東南アジアにおける "らい" の研究

西占貢教授，岡田誠太郎助教授(医学部)は1965年11月から12月まで，タイ国において主として療養所の小児 "らい" 患者を臨床観察し，病歴の調査，皮膚症状の記録を行なう。観察は今後数年にわたり継続調査する予定である。

（2） タイ国における結核の研究

寺松孝助教授(結核研究所)は1965年7月から8月にかけタイ国ノンブリ中央結核病院において，外科的療法の研究ならびに資料の収集にあたる。

2. 地 学 班

マレー半島の地質鉱物の研究

昨年度の滝本，吉住教授の予備調査にもとづき，マレー半島西部の地質構造と鉱物の賦存状態をあきらかにするため，1965年8月から9月，谷口敬一郎助教授，入江恒爾講師（工学部）は物理探鉱法による調査を，鈴鹿恒茂助教授，港種雄講師（工学部）は地質鉱物学的調査を実施する。

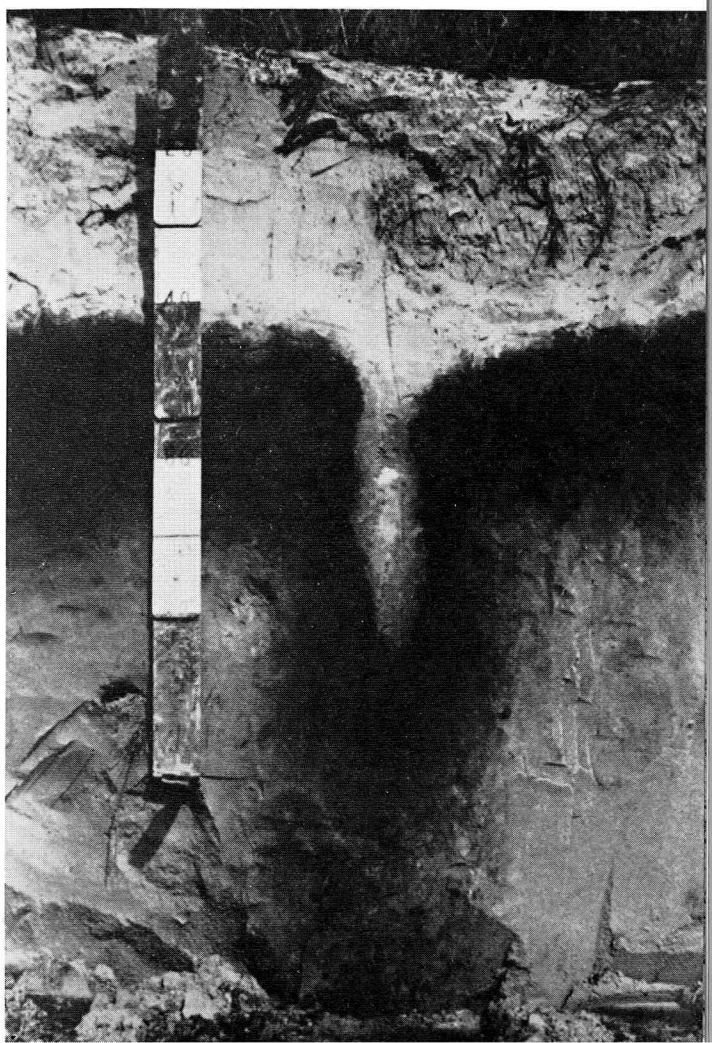
3. 農 業 生 産 班

東南アジアの稲作改良の研究

川口桂三郎教授，久馬一剛助手(農学部)が熱帯水田土壌の研究を担当し，1965年11月から66年2月にかけ，セイロン，カンボジア，フイリピンで稲作の立地としての水田土壌を調査する。

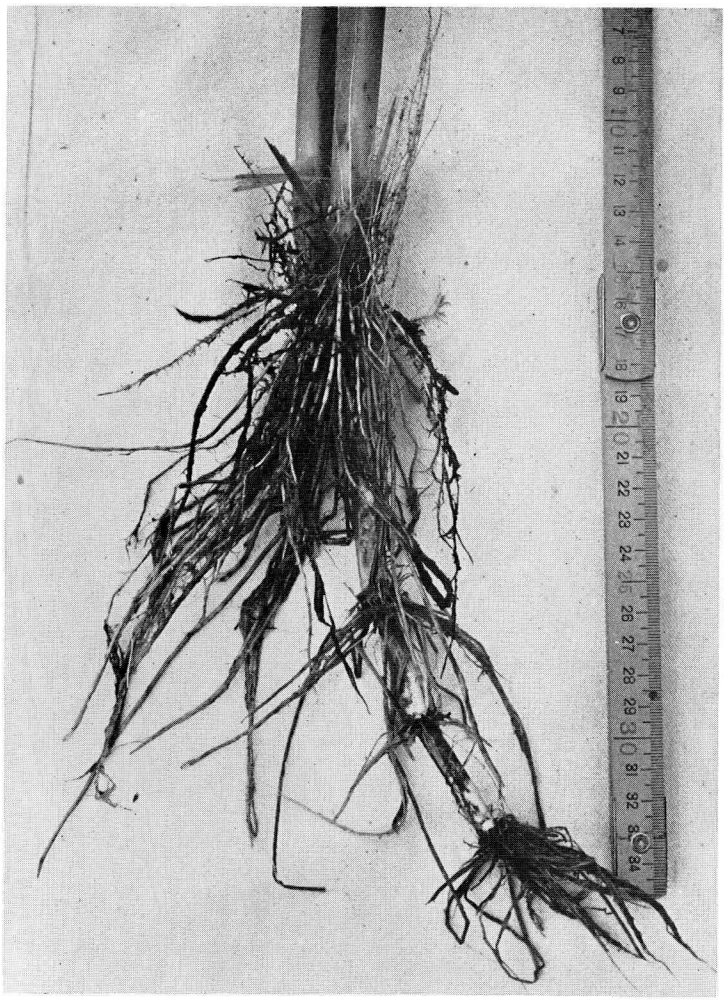
渡部忠世助教授（京都府立大学農学部）は1965年7月から66年1月にかけて，タイ国北部，東北

熱帯ポドゾルー海岸の砂地などに発達する。厚い漂白層（上部）とその直下の顕著な腐植・鉄の集積層が特徴。



マットの材料になるコク（スゲの一種）は農家の現金収入になる。マットに編むのは主として女性のしごと。

ケナフ（タイ・ジュート）のレッティレグ。水に漬けた茎の繊維や木質部以外が分解したあと靱皮部をはぎとり繊維をとりだす。

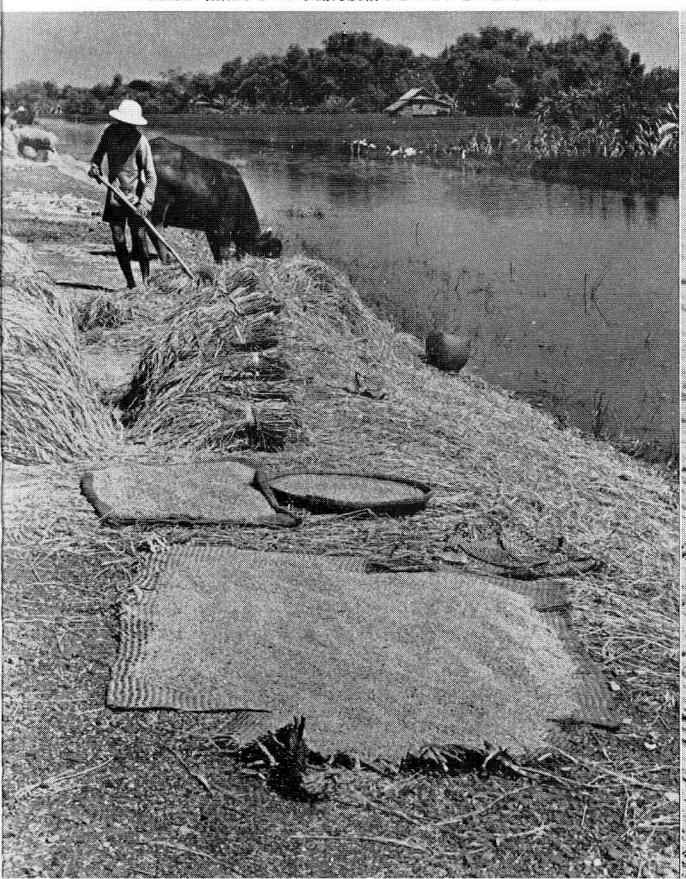


農耕作業

強還元田に深植えされたイネの根は下の方からくさり，上の方の根だけのこる。

田　植　え。

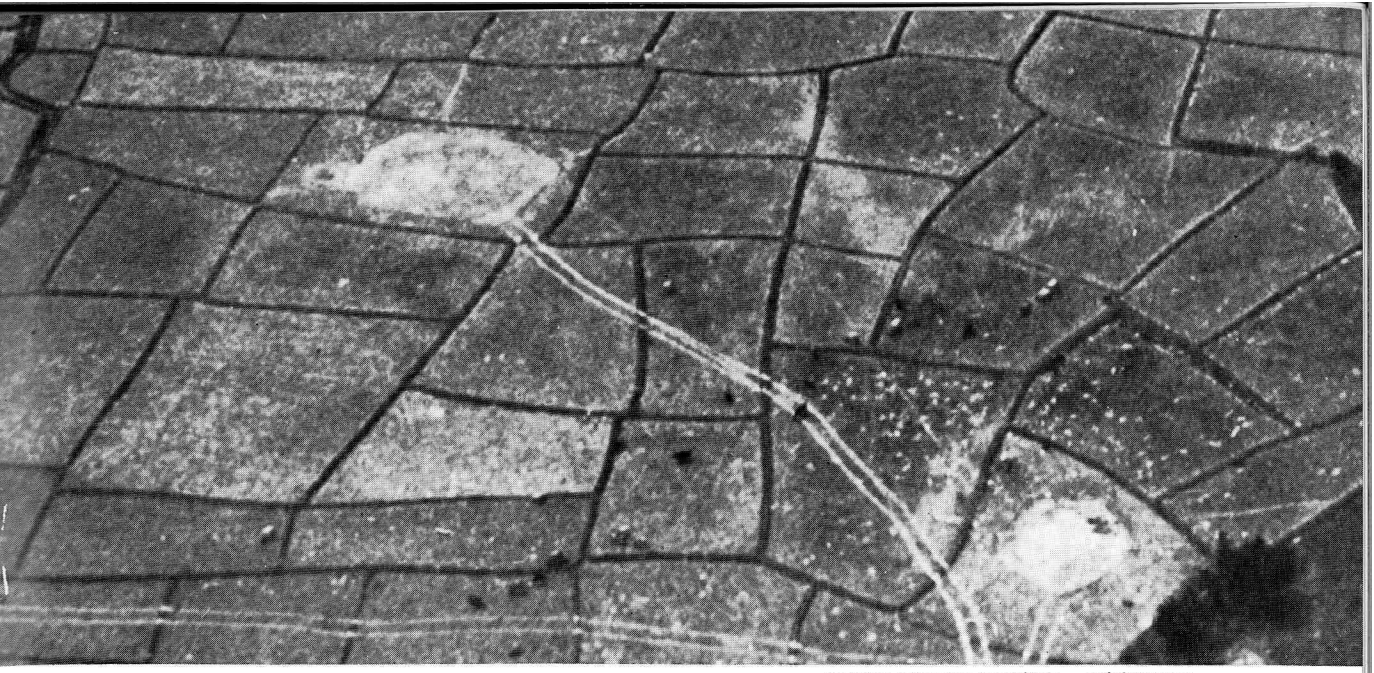
脱穀には水牛にふませる畜力脱穀，人間がイネワラをたたきつける人力脱穀，機械力をつかう動力脱穀などでさまざなま方式がある。



ウキイネの収穫。

雨季にはいり水田の準備。

水牛にふませる畜力脱穀。



収穫期の水田はカラカラに乾燥し，水牛車がモミを満載しても通行可能になる。空からみた水牛車道。

部ならびにラオスにおいてモチ稲栽培の実態を調査し，作物学的な見地から改良方法を検討する。

福井捷朗(農学研究科植物栄養学専攻)はタイ国の水田土壌の植物養分の季節的変動を，施肥技術の改良との関連において調査分析する。

小林達治助手(農学部)は水田土壌中の窒素固定性微生物の研究を担当し，1965年8月から9月にかけタイ国の水田土壌中の窒素固定性微生物の種類，分布，菌数比を調査する。なお，福井の協力により約6カ月にわたり土壌試料を採集する。

赤井重恭教授(農学部)はイネおよびイネ科草本植物の疾病調査を担当する。1965年10月から11月にかけて，病害の発生状況とその生育ならびに形態におよぼす影響を調査する。

沢田敏男教授，南　勲助教授(農学部)は広域水利計画にかんする調査の一環として1965年8月チャオプラヤ・デルタにおける海水浸入機構と水利計画を調査し，またメコン水系の流出量の解析資料の収集をおこなう。

4. 生　物　班

タイ国の植物相調査

昨年度の予備調査にひきつづき，1965年10月から66年1月にかけて，田川基二助教授，岩槻邦男助手(理学部)，北川尚史講師(奈良学芸大学理学部)，福岡誠行(理学研究科植物学専攻)らはタイ国北部および南部の山地における植物相，とくに高等隠花植物の採集調査をおこなう。

5. 個　別　調　査

（1） 熱帯ウィルスの研究

東昇教授(ウィルス研究所)は1965年8月バンコクのウィルス・センターでデング熱病原体ウィルスの組織培養をおこない，その超薄切片を電子顕微鏡的に検査し，デング熱ウィルス株の検出，感染細胞の観察によりその分布状況をあきらかにしようとする。

（2） 東南アジアにおける歯牙疾患の研究

美濃口玄教授(医学部)は口腔外科学の立場から，1965年1月から2月にかけて歯牙弗素症の発現状況を調査し，う蝕予防のため上水道弗素化の可能性の検討と添加弗素量算定基準を確立する。

（3） 魚毒成分含有植物の探索

河津一儀助手(農学部)は1965年8月，マレー半島で古くから魚毒として用いられている植物*Callicarpa cana* L. の探索採集をおこない，有効成分の検出をこころみる。

6. 予　備　調　査

インドネシア地域調査の予備調査

吉井良三教授(教養部)は昨年度の予備調査にもとづき，アンボン，ブル，セラム諸島の総合調査計画をたてたが，本年度は今立源太良助手(東京医科歯科大学教養部)，酒井敏明(文学研究科地理学専攻)らとともに，1965年7から9月にかけて現地での踏査ならびに諸機関との交渉をはじめる。

出版計画　季刊誌「東南アジア研究」は1965年6月出版の3巻1号(通巻9号)につづき，3巻5号(1966年3月)まで5冊を刊行する。そのうち1冊は1965年9月に開催される水資源利用シンポジウム特集号として出版される予定である。

「東南アジア研究センター調査報告」は調査資料の整理のおわったものの出版を準備中である。

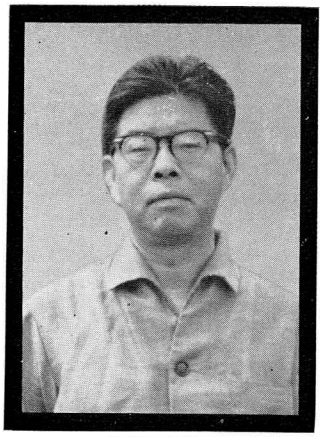
不定期刊行物として「東南アジア研究双書」を計画にとり入れる。第1号には故棚瀬襄爾博士の「他界観念の原始形態」を予定している。

交流計画　内外の東南アジア研究者にシンポジウム，講演会研究活動に参加を依頼する。

1965年5月31日より6月2日にかけて国際シンポジウム "東南アジアにおける日本の将来" を開催した。このシンポジウムには，学外から，Prof. Prachoom Choomchai (タイ)，Prof. Josefa Saniel(フィリピン)，Prof. David Wurfel (マレーシア)，Prof. Harry Benda (アメリカ)，Prof. V. P. Dutt (インド)，Prof. Herbert Feith (オーストラリア)，Prof. Hla Myint (イギリス)，Dr. Guy Pauker (アメリカ)，Dr. Paul Langer (アメリカ)，衛藤瀋吉助教授(東大教養学部)，福地崇生助教授(国際キリスト教大学経済学部)，石川滋教授(一橋大学経済学部)の参加をえた。

1965年9月，農林省，海外技術協力事業団と共催し，"東南アジアにおける水資源利用にかんするシンポジウム" を開催する。このシンポジウムは，安芸皎一氏を議長として，各界からの専門家約60名を集め，東南アジアの水利開発計画，水文，作物とかんがい量，かんがい排水事業などをテーマとして，討論をおこなう予定である。

1965年5月29日，京都大学において第1回学内学術講演会が開かれ，"東南アジアの自然と生活" にかんする講演報告があった。ついで6月3日大阪・関電ホールにおいて，関西経済団体連合会後援のもとに第1回学外公開講演会を開催した。両講演会とも日本放送協会提供のテレビ・フィルム≪タイ国の山地民≫を上映して。300～400名の熱心な聴衆を集め，盛会であった。



故棚瀬襄爾博士

図書資料整備計画　HRAF の整理完了にひきつづき，本年度以降は京都大学所蔵の東南アジア関係文献目録の整備を開始する予定である。

養成計画　大学院学生を対象とする東南アジアにかんするセミナーと講義を計画中である。

また選考の結果，石毛直道(文学研究科考古学専攻)と荻野和彦助手が本年度留学生となった。桂満希郎(文学研究科言語学専攻)はチェラロンコーン大学留学が1年間延長をみとめられた。

おわりに　研究センター発足以来2カ年間，研究計画その他の事業計画は順調に進展した。しかし，わが国の東南アジア研究は緒についたばかりで，蓄積も少なく，体制も充分ではない。われわれの研究対象は経済的に，社会的にまた政治的にも急激な変化をとげつつある。総合的地域研究を推進するためには各専門分野研究者たちの努力と協力体制の拡充発展が望まれる。各界の今後の御支援をお願いするしだいである。

なお，マレーシア・インドネシア地域調査計画のリーダーであった棚瀬襄爾博士(当時文学部助教授)が現地調査より帰国後まもなく1964年12月10日狭心症のため急逝された。棚瀬博士の東南アジア研究センターの設立につくされた努力をおもうとき，惜しみてあまりある。ここに故博士の冥福を心より祈りたい。

東南アジア研究センター研究担当者名簿

部局名	職名	氏名	研究題目
京都大学東南アジア研究センター	所長（兼）	岩村　忍	東南アジアの調査一般
〃	教授	本岡　武	東南アジア諸国の農業開発
〃	助教授	石井米雄	タイ国近代史の研究
〃	助手	飯島　茂	タイ国の山地民社会の研究
〃	〃	荻野和彦	熱帯林の物質生産力の推定
〃	研修員	水野浩一	タイ国東北部の村落社会の変動
〃	〃	矢野暢	タイ国南部の村落社会の近代化
〃	〃	坪内良博	マラヤの農村社会の研究
文学部	教授	泉井久之助	マラヤ及びインドネシアの諸方言の直接的採録研究を中心とするマラヤ・ポリネシア諸語の比較言語学的研究
〃	〃	織田武雄	東南アジアにおける村落の研究
〃	〃	池田義祐	東南アジアにおける家族及び村落の研究
〃	助教授	西田龍雄	東南アジア言語の研究
教育学部	教授	相良惟一	東南アジアにおける教育制度の比較，および近代化と教育の役割についての研究
〃	〃	池田　進	同上
〃	〃	佐藤幸治	東南アジア地域における仏教（禅）の比較研究
〃	助教授	小田　武	東南アジア地域における教育内容についての研究
〃	〃	森口兼二	日本人の東南アジア観と東南アジア諸国における日本観
〃	〃	小倉親雄	東南アジアにおける読書の資源と機会の研究
〃	助手	栗本一男	東南アジアにおける教育制度の比較および近代化と教育の役割についての研究
法学部	教授	田畑茂二郎	東南アジアにおける国際関係
〃	〃	猪木正道	東南アジア諸国家における政治組織と政治過程の比較研究
〃	〃	福島徳寿郎	同上
〃	〃	勝田吉太郎	東南アジア諸国の政治思想の研究
〃	〃	平場安治	東南アジア諸国の比較法的研究
〃	〃	中田淳一	同上
〃	〃	溜池良夫	同上
〃	〃	磯村哲	同上
〃	〃	道田信一郎	同上
〃	助教授	清永敬治	東南アジア諸国家における政治組織と政治過程の比較研究
〃	〃	園部逸夫	同上
〃	〃	香西　茂	同上
〃	〃	高坂正堯	東南アジアにおける国際関係
〃	〃	上山安敏	東南アジア諸国の比較法的研究
〃	〃	龍田節	同上
〃	〃	村松岐夫	同上
経済学部	教授	堀江保蔵	東南アジアの経済的近代化要因の研究
〃	助教授	鎌倉昇	東南アジアの経済近代化を阻害している事情の研究
理学部	教授	芦田譲治	東南アジアの植物の研究
〃	〃	波多野博行	東南アジアにおける ^{18}O 炭酸カルシウム源の分布調査
〃	〃	小沢泉夫	東南アジアにおける地球物理学の研究
〃	助教授	田川基二	東南アジアの植物相の調査および研究
〃	助手	岩槻邦男	東南アジアのシダ植物の調査および研究
医学部	教授	西尾雅亮	東南アジア諸地域における公衆衛生学的研究
〃	〃	浅山亮一	東南アジア地区における失明の原因調査とその対策
〃	〃	村上仁	東南アジアにおける民族精神医学的研究
〃	〃	美濃口玄	東南アジア地区における飲料水中弗素量と斑状歯発症との関係
〃	〃	西占貢	東南アジアにおける〝らい〟の研究
〃	助教授	岡田誠太郎	同上
〃	〃	小野尊睦	東南アジアにおける口腔疾患調査
〃	助手	佐藤匠	同上
薬学部	教授	井上博之	東南アジアの医薬資源としての植物の化学的研究
〃	〃	木島正夫	東南アジアにおける薬用植物および生薬の調査研究
〃	講師	秦清之	同上
工学部	教授	滝本清	東南アジアにおける酸性火成岩にともなう鉱床の研究
〃	〃	松尾新一郎	タイ国における土質・地下水にかんする研究
〃	〃	吉住永三郎	東南アジアにおける地下資源の探査
〃	〃	向井滋	東南アジアにおける鉱産資源の選鉱にかんする研究
〃	〃	森山徐一郎	東南アジアにおける錫石・イルメナイト鉱の冶金学的研究

部局名	職名	氏名	研究題目
工学部	教授	岩井重久	東南アジアの上下水道，衛生設備とその将来開発にかんする研究
〃	助教授	鈴鹿恒茂	東南アジアにおける酸性火成岩にともなう鉱床の研究
〃	〃	谷口敬一郎	東南アジアにおける地下資源の探査
〃	〃	若松貴英	東南アジアにおける鉱産資源の選鉱にかんする研究
〃	講師	西田一彦	タイ国における土質・地下水にかんする研究
〃	〃	港種雄	東南アジアにおける酸性火成岩にともなう鉱床の研究
〃	〃	入江恒爾	東南アジアにおける地下資源の探査
農学部	教授	四手井綱英	東南アジアの自然環境の研究
〃	〃	川口桂三郎	東南アジアの水田土壌
〃	〃	冨士岡義一	東南アジアにおける土地・水資源ならびに農業開発の調査研究
〃	〃	沢田敏男	東南アジアにおける農業水利の総合的研究
〃	〃	三井哲夫	魚毒性成分含有植物の探索
〃	〃	西川義正	東南アジア地域における家畜の生産性にかんする調査 —とくに受胎性の向上にかんする技術的研究—
〃	〃	桑原正信	タイ国における農業簿記の普及状況および同国に適応せる簿記様式の研究
〃	〃	長谷川浩	東南アジアにおける稲作にかんする研究
〃	〃	赤井重恭	東南アジアにおける作物病害の研究
〃	〃	小林章	乾燥地帯・湿潤地帯における果樹栽培の研究
〃	〃	貝原基介	簿記調査にもとづくタイ国農業経営の研究
〃	助教授	堤利夫	東南アジアの自然環境の研究
〃	〃	南勲	東南アジアにおける広域水利計画にかんする研究
〃	〃	高橋英一	窒素固定微生物ならびに水稲の栄養生理
〃	〃	菊地泰次	タイ国における農業簿記の普及状況及び同国に適応せる簿記様式の研究
〃	〃	阿部亮耳	簿記調査にもとづくタイ国農業経営の研究
〃	〃	松尾嘉郎	東南アジアの水田土壌の研究
〃	助手	久馬一剛	東南アジアの水田土壌の研究
〃	〃	小林達治	水田土壌中の窒素固定性微生物の探究
〃	〃	河津一儀	魚毒性成分含有植物の探索
教養部	教授	柴田実	東南アジアの稲米儀礼（稲作農耕民族の民俗調査）
〃	〃	西村睦男	東南アジアの経済地理学的研究
〃	〃	藤岡謙二郎	東南アジアの都市地理学的研究
〃	〃	大浦幸男	東南アジア諸国における外国語教育
〃	〃	山下孝介	南方栽培植物の特性の調査ならびにそれらの導入にかんする研究
〃	〃	久米直之	南方植物の発生生理にかんする研究
〃	〃	吉井良三	東南アジアにおける森林土壌内の生物相の研究
〃	〃	東中秀雄	1. アジアの重力にかんする研究 2. 物理探鉱法によるアジア各地の局地的地下構造の研究と地下資源の開発
〃	〃	太田柾次郎	磁気赤道帯における地磁気異常変化の研究および磁気測量
〃	助教授	安藤昭一	東南アジア諸国における外国語教育
〃	〃	大橋保夫	東南アジア諸国の言語政策
〃	〃	平野実	陸水産藻類の植物地理学的研究
〃	〃	尾崎雄二郎	東南アジアにおける中国語方言の調査研究
〃	助手	横田澄司	自己評価と行動型式との関係—社会的相互作用を中心として—
〃	〃	足利健亮	東南アジアの歴史地理学的研究
化学研究所	教授	水渡英二	東南アジアにおけるゴム加工の調査研究
人文科学研究所	教授	平岡武夫	東南アジアの仏教の研究
〃	助教授	日比野丈夫	マラヤの華僑調査
〃	〃	吉田光邦	マラヤの村落調査
結核研究所	教授	長石忠三	東南アジアにおける結核の現状調査および結核外科の指導
〃	〃	内藤益一	東南アジアにおける結核の疫学ならびに化学療法にかんする研究
〃	助教授	寺松孝	東南アジアにおける結核の現状調査および結核外科の指導
〃	〃	前川暢夫	東南アジアにおける結核の疫学ならびに化学療法にかんする研究
木材研究所	教授	貴島恒夫	南方材の調査および研究
〃	〃	北尾弘一郎	同上
〃	助教授	西本孝一	同上
防災研究所	教授	矢野勝正	東南アジアにおける水災害にかんする調査研究
〃	〃	石原安雄	同上
〃	〃	角屋睦	同上
〃	〃	芦田和男	同上
〃	〃	山口真一	東南アジアにおける地盤・地質および地すべり地の分布型の研究
〃	〃	石崎灌雄	東南アジアにおける構造物の暴風災害地にかんする研究
〃	〃	小堀鐸二	東南アジアにおける構造物と地盤の震害調査ならびに震害防禦の研究

部局名	職名	氏名	研究題目
防災研究所	教授	若林　実	東南アジアにおける構造物の風害ならびに震害にかんする研究
〃	助教授	樋口明生	東南アジアにおける水災害にかんする調査研究
〃	〃	中川博次	同上
〃	〃	長尾正志	同上
〃	〃	高田雄次	東南アジアにおける地盤・地質および地すべり地の分布型の研究
〃	〃	光田寧	東南アジアにおける構造物の暴風災害にかんする研究
〃	〃	南井良一郎	東南アジアにおける構造物と地盤の震害調査ならびに震害防禦の研究
〃	〃	野中泰二郎	東南アジアにおける構造物の風害ならびに震害にかんする研究
〃	助手	桂順治	東南アジアにおける構造物の暴風災害にかんする研究
〃	〃	井上豊	東南アジアにおける構造物と地盤の震害調査ならびに震害防禦の研究
〃	〃	鈴木有	同上
〃	〃	松井千秋	東南アジアにおける構造物の風害ならびに震害にかんする研究
ウイルス研究所	教授	東昇	東南アジアにおける熱帯病の病源学的研究
〃	〃	松本清一	狂犬病街上毒ウイルスの蒐集
〃	助教授	市田文弘	東南アジアにおける流行性肝炎の現地調査

東海大学文学部長	京大名誉教授	足利惇氏	東南アジアにおけるインド的要素
関西大学文学部	教授	藤本勝次	マラヤのイスラム社会の調査研究
京都女子大学文学部	教授	藤原利一郎	東南アジアにおける華僑発展史の研究
帝塚山大学	助教授	伊原吉之助	東南アジア近代化の比較史的研究
東京医科歯科大学教養部	助手	今立源太良	東南アジアにおける森林土壌動物の研究
広島大学教養学部	教授	石堂豊	東南アジア諸国における社会教育の実態研究および教育事情の教育経営学的研究
大阪市立大学法学部	教授	神谷不二	東南アジアとくにインドネシアにおける政治構造
京都府衛生研究所環境衛生課長		加藤釤郎	インドネシアの環境衛生とくに風土病と衛生動物との関係
富山大学薬学部	教授	木村康一	東南アジアにおける薬用植物
奈良学芸大学	講師	北川尚史	東南アジアの苔類の研究
天理大学外国語学部	〃	前田清茂	マラヤ村落における華僑
龍谷大学文学部	助教授	口羽益生	マラヤならびにインドネシアの社会構造
天理大学文学部	教授	中村孝志	南方華僑史の研究
兵庫農科大学	教授	佐藤孝	東南アジアにおける畑作の栽培学的研究
京都府立医科大学医動物学教室	研究員	正垣幸男	東南アジアにおけるフイラリア，マラリアおよび寄生蠕虫についての疫学的調査とその対策についての研究
神戸大学教育学部	教授	高木太郎	東南アジア諸国における教育制度の比較研究
東北大学薬科大学	教授	高橋三雄	フイリピンとタイ国の薬用資源の化学的研究
財団法人アジア救ライ協会	医務部長	戸田圓二郎	タイ国におけるライの臨床および病理学的調査研究
東京大学東洋文化研究所	講師	築島謙三	マライ人村落の自治体制と人倫意識
京都産業大学	京大名誉教授	上田弘一郎	東南アジアにおける竹林の生態学的研究
京都府立大学農学部	助教授	渡部忠世	東南アジアにおける畑作の栽培の作物学的研究
大阪市教育研究所	所長	山口三郎	東南アジアの教育制度の比較研究
		山本利雄	東南アジアにおける肺・心臓・外科の現状調査および指導
岡山大学農業生物研究所	教授	小林純	東南アジアの河川の化学的研究

規　　定

国立学校設置法施行規則（抄）

（東南アジア研究センター及びその所長）

第二十条の二　京都大学に，東南アジア地域に関する総合研究を推進するための組織として，東南アジア研究センターを置く。

2　東南アジア研究センターに所長を置き，教授をもって充てる。

京都大学東南アジア研究センター管理委員会規程

（昭和40年4月27日達示第8号制定）

第一条　京都大学に東南アジア研究センター管理委員会（以下「管理委員会」という。）を置く。

第二条　管理委員会は，東南アジア研究センター（以下「研究センター」という。）に関する次の各号にかかげる事項を審議する。

一　所長の選考および任期に関すること。

二　教官の人事に関すること。

三　規程，内規等の制定および改廃に関すること。

四　年次研究計画および予算に関すること。

五　その他研究センターの管理運営に関する重要事項

2　管理委員会は，研究センターの毎年度の研究報告および決算報告書を提出させるものとする。

第三条　管理委員会は，次の各号にかかげる委員で組織する。

一　学部長

二　教養部長

三　関係研究所長

四　研究センター所長

2　前項第三号の委員は，総長が委嘱する。

第四条　管理委員会に委員長および副委員長を置く。

2　委員長および副委員長は，委員の互選によって定める。

3　委員長および副委員長の任期は，2年とする。

第五条　管理委員会は，委員長が招集し，議長となる。

2　前項の招集は，年一回以上行なわなければならない。

3　2名以上の委員から審議事項を示して管理委員会の開催を求められたときは，委員長は，すみやかに管理委員会を招集しなければならない。

4　副委員長は，委員長を補佐し，委員長に事故があるときは，その職務を代行する。

第六条　議案は，前条第3項に定める場合を除き，委員長が管理委員会に付議する。

第七条　管理委員会は，委員の4分の3以上が出席しなければ開会することができない。

第八条　管理委員会の議事は，出席者の3分の2以上の多数で決する。

第九条　委員長が必要と認めたときは，委員以外の者に出席を求め，意見を聞くことができる。

第十条　管理委員会の事務を処理するため幹事若干名を置き，総長が委嘱する。

第十一条　前各条に定めるもののほか，議事の運営その他の必要事項は，管理委員会が定める。

附則

1　この規程は，昭和40年4月27日から施行し，昭和40年4月1日から適用する。

2　京都大学東南アジア研究センター規程（昭和38年達示第1号）および京都大学東南アジア研究センター管理委員会規程（昭和38年達示第2号）は，廃止する。

東南アジア研究センター組織内規

第一条　この内規は，東南アジア研究センター（以下「研究センター」という。）の内部組織について必要な事項を定める。

第二条　研究センターに運営委員会を置く。

2　運営委員会は，研究センターの業務の企画および運営に関する重要事項を審議する。

3　運営委員会は，所長，第四条の主任および副主任，専任の教授および助教授ならびに研究担当教官のうちから所長が委嘱した者をもって組織する。

4　運営委員会は，所長が招集し，その議長となる。ただし，所長に事故があるときは，総務部の主任が議長となる。

第三条　研究センターに総務部，人文・社会科学部および自然科学部を置く。

2　部の業務は，次の各号に定めるとおりとする。

一　総務部　研究交流計画，研究者養成計画の立案，実施および連絡調整ならびに研究資料の収集，整理および保管等に関すること。

二　人文・社会科学部　人文・社会科学的調査研究の立案，実施および連絡調整に関すること。

三　自然科学部　自然科学的調査研究の立案，実施および連絡調整に関すること。

第四条　部に主任および副主任を置く。

2　主任および副主任は運営委員会の議を経て，専任教官および研究担当教官のうちから所長が委嘱する。

3　主任は，部の業務を総括する。

4　副主任は，主任を補佐し，主任に事故があるときは，その職務を代行する。

第五条　人文・社会科学部および自然科学部にそれぞれの調査研究計画の遂行上必要な場合には，班を置く。

2　班はそれぞれの調査研究計画を立案し，実施する。

3　班の組織については，運営委員会の議を経て所長が定める。

第六条　調査研究計画の効率的な実施をはかるため，必要に応じて所長は，専任教官および研究担当教官による合同会議を開くものとする。

第七条　研究担当教官は，関係部局長の推薦のあったものにつき運営委員会において選考する。

第八条　所長は，運営委員会の議を経て他大学の教官等に研究協力を依頼することができる。

第九条　所長は，運営委員会の議を経て大学院学生等に調査研究の機会を与えることができる。

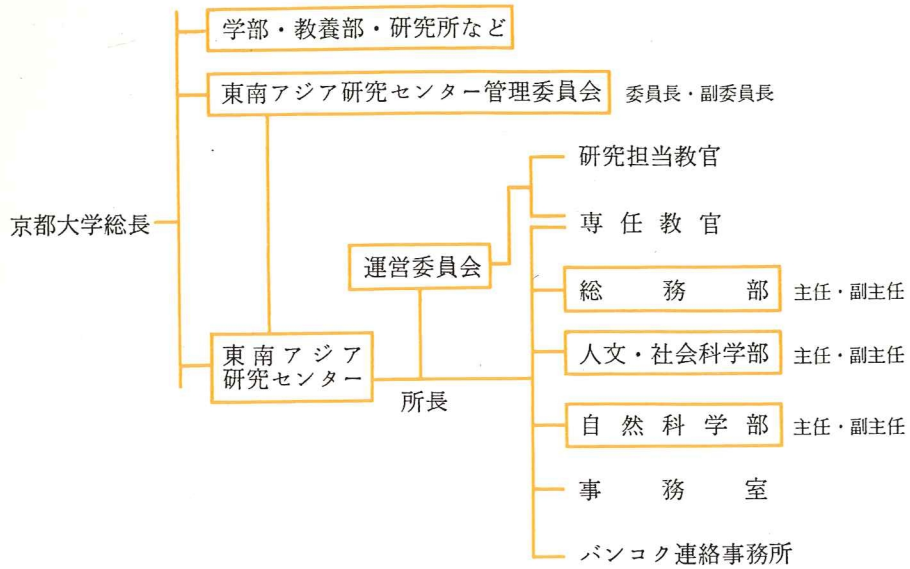
第十条　この内規の運用に関する細目については，運営委員会の議を経て所長が定める。

附則

1　この内規は，昭和40年5月11日から施行し，昭和40年4月1日から適用する。

2　東南アジア研究センター組織運営内規（昭和38年6月4日制定）および東南アジア研究センター運営協議会内規（昭和38年6月4日制定）は，廃止する。

東南アジア研究センター
機　　構　　図



東南アジア研究センター管理委員会

委員長	農学部長	小林　章
副委員長	人文科学研究所長	森　鹿三
委員	文学部長	井上智勇
〃	教育学部長	重松俊明
〃	法学部長	田畑茂二郎
〃	経済学部長	岸本英太郎
〃	理学部長	後藤良造
〃	医学部長	山田　隼
〃	薬学部長	上尾庄一郎
〃	工学部長	桜田一郎
〃	教養部長	山下孝介
〃	東南アジア研究センター所長	岩村　忍
幹事	庶務部長	内藤和美
〃	経理部長	西間木久郎

東南アジア研究センター運営委員会

委員長	東南アジア研究センター所長	岩村　忍	
委員	文学部教授	泉井久之助	
〃	文学部教授	織田武雄	(人文・社会科学部主任)
〃	教育学部教授	相良惟一	(総務部副主任)
〃	法学部教授	猪木正道	(人文・社会科学部副主任)
〃	経済学部教授	堀江保蔵	(総務部主任)
〃	理学部教授	芦田譲治	(自然科学部主任)
〃	医学部教授	美濃口　玄	
〃	医学部教授	西占　貞	
〃	薬学部教授	木島正夫	
〃	工学部教授	瀧本　清	
〃	農学部教授	四手井綱英	(自然科学部副主任)
〃	農学部教授	川口桂三郎	
〃	教養部教授	柴田　実	
〃	教養部教授	吉井良三	
〃	東南アジア研究センター教授	本岡　武	
〃	東南アジア研究センター助教授	石井米雄	

目　　次

はじめに…… 1
センターの歩み…… 2
1964年度事業の成果…… 3
研究事業…… 3
Ⅰ．社会科学部…… 3
1．ビルマ・タイ国地域調査…… 3
2．マレーシア・インドネシア地域調査…… 4
3．東南アジア諸国における政治組織と政治過程の比較研究…… 4
4．東南アジアにおける教育制度ならびに教育構造の比較研究…… 5
5．タイ国北部における諸言語の調査…… 6
6．東南アジア経済における近代化要因の研究…… 6
7．東南アジアにおける宗教の研究…… 6
8．東南アジア華僑の歴史的社会的研究…… 6
Ⅱ．自然科学部……10
1．医薬班……10
(1)　東南アジアにおける〝らい〟の実態調査とその病理学的研究……10
(2)　タイ国における肺結核の現状調査……10
2．地学班……11
(1)　タイ国，マレーシアの地質および鉱床の予備調査……11
(2)　非鉄金属資源ならびにその製錬にかんする研究……11
(3)　土質・地下水の研究……11
3．農業生産班……11
(1)　マレーシア・タイ国の水田土壌調査……11
(2)　東南アジアにおける農業かんがいおよび排水にかんする調査……11
(3)　東南アジアにおける広域水利計画の予備調査……11
4．生物班……11
(1)　生物相研究の予備調査……11
出版事業……12
交流事業……12
図書資料整備事業……12
養成事業……12
1965年度事業の展望……13
研究計画……13
Ⅰ．社会科学部……13
1．ビルマ・タイ国地域調査計画……13
2．マレーシア・インドネシア地域調査計画……13
3．東南アジアの言語……14
4．東南アジアの政治構造……14
5．東南アジアの宗教……14
6．東南アジアの教育……14
7．東南アジアの経済……14
Ⅱ．自然科学部……15
1．医薬班……15
(1)　東南アジアにおける〝らい〟の研究……15
(2)　タイ国における結核の研究……15
2．地学班……15
3．農業生産班……15
4．生物班……19
5．個別調査……19
(1)　熱帯ウィルスの研究……19
(2)　東南アジアにおける歯牙疾患の研究……19
(3)　魚毒成分含有植物の探索……19
6．予備調査……19
出版計画……20
交流計画……20
図書資料整備計画……20
養成計画……20
おわりに……20
東南アジア研究センター研究者名簿……21
国立学校設置法施行規則（抄）……24
京都大学東南アジア研究センター管理委員会規程……24
東南アジア研究センター組織内規……24
東南アジア研究センター機構図……表　Ⅲ
東南アジア研究センター管理委員会……表　Ⅲ
東南アジア研究センター運営委員会……表　Ⅲ

京都大学東南アジア研究センター
京都市左京区吉田下阿達町14
昭和40年９月30日発行